

I C U 教育研究所長就任にあたって

教育研究所長 千葉 杲弘

平成4年度から、I C Uの伝統ある教育研究所の所長としておつかえすることになり、研究所所員各位ならびに教育研究をご利用いただいている皆様にご挨拶申し上げる次第であります。

新しくこの任に就くづくにあたり、第一の任務はI C U『教育研究』の創刊号に日高第四郎先生が書かれた「I C U教育研究所設置の趣旨とその課題」という巻頭文を読むことでした。私はI C Uの教養学部、教育学大学院で第1期生として日高第四郎先生、小島軍造先生、西本三十二先生、岡部弥太郎先生の薫陶を受け、当時、国内国外に偉容を誇ったI C Uの教育学大学院を巣立って、ユネスコという国際社会に飛び出して30有余年、当時の青年も今は白いものが半分以上混じるようになり、また、I C Uに迎えられて、諸先生、諸先達の後を受けて、教育研究所に奉職することになりました。

大学院在学中は、当時研究所が行った「日本の民主主義教育の哲学的基礎」の特別研究にも直接加えていただき、多大の薫陶を受け、自分自身の思想的基礎の大部分を形成する機会に恵まれました。また、I C Uの視聴覚教育は当時日本では唯一のもっとも斬新な講義と施設を持っており、I C Uの栄光は国内に響きわたり、また、世界的第一人者であったエドガー・デール教授もI C Uを通して日本にお招きして、日本における教育実践の近代化に大いに貢献いたしました。

I C U『教育研究』創刊号が出版された1955年は、戦後間もなくで、日本に民主主義を確立する急務に迫られた時代でした。日高先生の巻頭文は、

その当時の事情をよく反映し、しかもすばらしい洞察力を持って、日本の進むべき道と教育の役割について明確に予言されておられます。40年近くたった現在、読み返してもその新鮮さと普遍性に魅了されます。ICU教育研究所を発足するに当たって、日高先生が抱かれたヴィジョンは、今日的な意義のある普遍的なヴィジョンでもあるわけであります。日高先生の示された教育研究所の研究課題と使命は、その後も数多くの教授、研究員の皆様によって引き継がれて参りました。教育哲学の研究、教育における基督教原理の研究、国際理解の教育の調査研究、教育心理学及び教育社会学の研究、視聴覚教育の研究及び実験、また大学生の補導問題の調査の各々の分野でICU教育研究所は先駆的な役割を果たしてきました。そしてこの伝統は今でも力強く息づいております。

諸先達の後をけがさないよう努力する所存でありますので、このご挨拶をかねて、皆様の一層のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

戦後の日本から脱皮した現在、受け身であった当時に比べて日本は世界の最先進国にのし上がり、国際貢献に真剣に取り組まなければならない時代になりました。しかし、日本は外国の知識、技術の導入には優れた才覚を持っておりましたが、貢献の分野では未だに経験も少なく、また専門的、技術的能力も充分発達していません。特に教育の分野は、経済面、技術面に比べて一段と遅れをとっているようです。留学生の受け入れにしても欧米先進国に比べるとなにかギクシャクとした問題を抱えており、また対外協力にいたっては専門知識、技能を持った国際協力の専門家の育成すらまだ組織的に取り組まれていません。

人間の尊厳と自由と平等に基づいた知的教育の国際協力は、日本の基本的な使命で、これまで先進諸国から多くを学びとって今日にいたった日本は、その経験を他の国々と分かち合い、共に進歩することを図らなければなりません。

この意味で、現在世界の教育問題の一番根底にある識字問題と開発の遅れにあえいでいるアフリカの教育研究にICU教育研究所が取り組むことは有

意義のことと思われます。日本では全くこの分野に関する研究者も調査研究もありませんので、ICU教育研究所が日本の国際貢献の一役を買うことができるのではないかと思います。と同時に、それは最もICU的な課題であるともいえます。ICUにとって最も重要と思われる課題、またICUしかできない課題についてご意見をいただきたく思います。